

万葉の川心

横浜市教育委員会
東部学校教育事務所 指導主事
澤井園子

物に寄せて思いを陳べたる歌百五十首

(巻第一二 三〇九二番歌)

白真弓 斐太の細江の 菅鳥の

妹に恋ふれか 眠を寝かねつる

「眠れない」…まさか、こんな日が自分に来るとは思わなかった。いつでもどこでも眠れるのが自慢であったし、体力回復の鍵だった。一度寝たら朝までぐっすり。少しの物音や揺り起こしなどでは起きる気配もなく、家族に呆れられることもよくあった。特に冬のこたつは魔物である。風邪をひく元凶と分かっているながら、温々とした心地よさから、気が付くと座椅子の角度を下げてたい衝動を抑えきれず、「少しだけ…」と目を閉じる。湯たんぼや行火で暖まった布団も同じ。冬布団の厚さは、かけるだけで毎日冬眠に入るがごとく、安堵感呼び、ゆつくりと深い眠りについたものだ。それなのに、突然、夜中に目が覚めてしばらく眠れない。何かあったわけではなく、悩み苦しんでいるのではない。振り返れば、恋い焦がれていたとしても、眠れないで相手を想った夜は、正直なところ記憶にない。だから、きつと、これは忍び寄る「老い」のひとつ。子どもの頃は、感じているか寝ているかの二択。食べながら寝てしまう幼子は、本当に可愛らしい。あれから何十年。万葉人の「眠を寝かねつる」がようやく体験できる歳になったと、今回も前向きにとらえておこう。

鳥の存在は人にとって、古来から神につながる重要なものだ。何しろ空を自由に飛べる。天空という別の世界と行き来ができることは憧れでもある。遠くに暮らす家族に逢いたいと願うとき、渡り鳥に想いを託す。また、明け方の鳴き声が別れと恋しさを呼び起こす。万葉集には、様々な生き物も詠まれている。

ほたる、せみ、こおろぎ、蝶々、蚊、蜘蛛。むささび、うま、とら、きつね、うさぎうま(ロバ)。鮎、ふな、鰻、かに、あわび、鯉、鯨。鳥も種類が多い。鴨、からす、雁、しながどり。しらさぎ、つばめ、もず、ほととぎす、ゆりかもめ、鷺などの大鳥もある。巻第十二では、鳥に寄せて詠まれた歌の中にこの歌がある。「白真弓の斐太の細江の菅鳥のように、妻を恋しく想っているからか、私は寝るに寝付けずにいる。」白檀で作った飛騨特産とも言われている弓。弓と言えば引く。引くが斐太にかかる。斐太の細江は所在不明だが、歌碑は岐阜県飛騨市古川町、高山本線杉崎駅のすぐ西に位置する細江歌塚公園の中にあり、脇には清らかに小川が流れている。菅鳥はハト、ヨシキリ、オシドリなど諸説ある。現在でも「おしどり夫婦」「鶺鴒呑みにする」「鳥の行水」など、鳥の生態に関する慣用句はさまざまあるが、万葉集を見ても、川同様に人は昔から動植物とともにある。育て、食し、さまざま利用し、必要に応じて駆除もしながら、豊かな暮らしを営んでいることをしみじみと感じるのである。

人生の三分の一程度は寝て過ごすと言われるが、夜という時間は長いのか一瞬なのか分からなくなることがある。夜の闇がいやおうなしに切なさを増やしてくる。同時に、日中の辛いことうれいこと疲れた心を、川の浄化作用のように夜が癒してくれる気もする。先日、友人が教えてくれたことが心に響いている。人の営みでは何より「時菜」が一番だと。



岐阜県飛騨市古河町細江歌塚公園